

## テモテ第一 5 : 17-6 : 2

## 「長老を支え、忠実に働く」

5:17 よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。

5:18 聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない」、また「働き手が報酬を受けることは当然である」と言われているからです。

5:19 長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。

5:20 罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。ほかの人をも恐れさせるためです。

5:21 私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちとの前で、あなたにおごそかに命じます。これらのことを偏見なしに守り、何事もかたよらないで行いなさい。

5:22 また、だれにでも軽々しく按手をしてはいけません。また、他人の罪にかかわりを持ってはいけません。自分を清く保ちなさい。

5:23 これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい。

5:24 ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。

5:25 同じように、良い行いは、だれの目にも明らかですが、そうでない場合でも、いつまでも隠れたままではあることはありません。

6:1 くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。それは神の御名と教えとがそしられないためです。

6:2 信者である主人を持つ人は、主人が兄弟だからといって軽く見ず、むしろ、ますますよく仕えなさい。なぜなら、その良い奉仕から益を受けるのは信者であり、愛されている人だからです。あなたは、これらのことを教え、また勧めなさい。

## はじめに

パウロが記したテモテへの手紙の中で、現在私たちが学んでいるのは、敬虔な生き方という課題が取り上げられている部分です。敬虔な生き方は、教会家族の関わりの中で訓練されます。

この教会には偽りの教えが入り込んでおり、その関係性が脅かされていました。

パウロは、テモテに手紙を書き、偽りの教えを正して信徒たちに敬虔な生き方をするよう励まそうとしていました。

前回の説教で読んだ個所では、教会家族の中で本当に困っている寡婦が見過ごされている問題が取り上げてられていました。

パウロは次に、教会内で緊張状態にあるふたつの関係について語ります。

具体的には、長老に対する適切な支援、そして主人としもべの関係についてです。

パウロはここで、キリストの教会家族が神を喜ばせられるかたちで機能していくための明確な指針を与えています。

今日の個所では、パウロはふたつのことを指摘します。

神に選ばれた教会の指導者である長老を尊敬することと、職場での人間関係についてです。

パウロは、奴隷について言明していますが、これは当時の一般的な職業だったからです。

とは言え、21世紀の現代の職場における人間関係にも適用できる原則がそこにあります。

### 1. 長老には二重の尊敬を。(5 : 17-25)

この個所で、パウロは教会の長老について3つの要点を挙げます。

- a) みことばを教え、しっかり指導をしている長老は、二重の尊敬を受けるにふさわしい。  
これまでのテモテ第一の説教から、長老の資質のひとつがみことばを教える能力であることを学びました。  
長老は、みことばを教えることだけが務めではありませんが、これはとても大切で多大な時間のかかる働きです。

聖書の他の個所でも、これと同じ教えがあります。  
この真理を支持する他の個所も読んでみましょう。

### **テサロニケ第一 5 : 12-13**

5:12 兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。 5:13 その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。

### **ヘブル 13 : 7、17**

13:7 神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならなさい。

13:17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であつて、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆いてすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならないからです。

では、二重の尊敬とは何でしょう。ここで使われているギリシャ語の単語は「ティーメー」で、尊敬と訳すことができます。

また、経済的支援を指す場合もあります。謝礼という意味のラテン語「honorarium」の語源でもあります。謝礼とは、誰かに感謝や敬意を示して渡すお金です。

OIC では、外部から講師をお招きした際にお渡しするものを謝礼「honorarium」と呼びます。神は、みことばの教えがとても大切であることを、パウロをとおして教えておられます。大切だからこそ、それをしっかりしてくれる人には十分に敬意を示す必要があるのです。では次の話題へと進みます。

- b) フルタイムで教える長老は、その働きに対して十分な報酬を受けるべきである。  
パウロは、長老に報酬を支払うという教えについて、まず旧約聖書の申命記 25 : 4 を引用します。

旧約聖書の律法は、脱穀作業をする牛にはその穀物を食べる権利があると教えます。食べさせないようにとくつこを牛にはめてはいけません。

パウロの主旨は明らかです。人間に食物を供給するために働いた動物にはその働きに応じて十分えさを与えなくてはならないと神は命じられました。

みことばを忠実に教える長老は、困っている群れに霊の食物を供給しているのですから、その人たちが金銭的報酬を得ることを、神はなおさら望んでおられるでしょう。

つまり、教会には、長老たちを経済的に支援する責任があるということです。

- c) ふたり以上の証人がない限り、誰も長老の罪や悪事を責めるべきではない。

神のしもべを不当に非難する人は必ずいます。

その理由はさまざまですが、長老をとおして語られた神の教えを受け入れたくない場合や、聖書の権威に従いたくない場合もあります。

長老の教えをとおして神の祝福が与えられることに対する、単なる妬みややっかみの場合もあります。

ヨセフ、モーセ、ダビデ、エレミヤ、ネヘミヤ、私たちの主イエス・キリスト、パウロといった人々は皆、不当に訴えられたり責められたりしました。

このことについてパウロは、旧約聖書から教えています。

### **申命記 19 : 15-21**

19:15 どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。

19:16 もし、ある人に不正な証言をするために悪意のある証人が立ったときには、  
19:17 相争うこの二組の者は、【主】の前に、その時の祭司たちとさばきつかさたちの前に立たなければならない。

19:18 さばきつかさたちはよく調べたうえで、その証人が偽りの証人であり、自分の同胞に対して偽りの証言をしていたのであれば、

19:19 あなたがたは、彼がその同胞にしようとたくらんでいたとおりに、彼になし、あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。

19:20 ほかに人々も聞いて恐れ、このような悪を、あなたがたのうちで再び行わないであらう。

19:21 あわれみをかけてはならない。いのちにはいのち、目には目、歯には歯、手には手、足には足。

イエスもこの教えを支持しておられます。

### **マタイ 18 : 15-16**

18:15 また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。

18:16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。

- d) 長老を含むすべての人が、罪を犯した場合には教会員全員の前で叱責を受けるべきである。それは、他の人々への戒めとするためである。

罪を犯した人に対する叱責については、教会の人々全員に当てはまりますが、この個所の文脈においては、パウロが教会内の偽教師を指して語っていると思われます。偽教師の中には長老だった者もいたでしょう。

パウロは、長老の間にある罪、特に偽りの教えは暴かなければならないと言っているのです。

教会家族の中で起こった叱責や懲罰については教会全体が知る必要があります。

隠すべきではありません。

パウロは 21 節で、教会の指導部内のすべての事柄は、不公平や偏見なくなされるべきであると語ります。

こういうわけで、教会のリーダーたちは、教会内に親しい友人がいるとたいへんなのです。誰でも友だちをひいきしたくなります。また、人種や文化、過去のいざこざなども偏見につながらないように注意する必要があります。

- e) 長老の人选は慎重に。(22-25 節)

パウロは、資格のない人が長老として教会の働きにかかわるのを防ぐ最善策は、軽々しく按手をしないことだと言います。

では、按手とはなんでしょう。

新約聖書では、任命する際に手を置くことです。

### **使徒 6 : 2-7**

6:2 そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。

6:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。

6:4 そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」

6:5 この提案は全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、

6:6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。

6:7 こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰に入った。

### テモテ第二 1 : 3-7

1:3 私は、夜昼、祈りの中であなたのことを絶えず思い起こしては、先祖以来きよい良心をもって仕えている神に感謝しています。

1:4 私は、あなたの涙を覚えているので、あなたに会って、喜びに満たされたいと願っています。

1:5 私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。

1:6 それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。

1:7 神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。

今読んだ個所で、使徒たちは7人の男性を奉仕に任命しました。そして、パウロはテモテをエペソの働きのために任命しました。

後に、新たな長老を任命するのは長老たちの責務となりました。

今日の聖書個所の文脈では、誰かに手を置くということは、その人が教会の奉仕の適任者であり、その務めを受け入れたことを認めます。

ですから、その人の信じる教理と生き方について入念に審査を受け、長老の場合はみことばを教える指導力についての審査も受けなくてはなりませんでした。

手を置くという慣習は、旧約聖書が起源です。

いけにえの動物に手を置いて、自分といけにえがひとつであることを示したのが始まりです。

また、モーセはヨシュアを選んだとき、またレビ族の祭司を任命したときに手を置きました。(民数記 8 : 5-13、27 : 18-23、申命記 34 : 9)

これは、すべての教会に当てはまる大切な原則です。これについては、今日のメッセージの最後のまとめと適用部分でも触れます。

長老に関する教えの部分を終える前に、23節についてお話ししなければなりません。これは、長老にも教会員にも大切な教えです。

パウロは、テモテの健康状態を気にかけています。テモテはとても優秀な長老で、きよく霊的に健全であることに専心していました。

それで、旧約聖書のナジル人のように禁酒しようとしたのでしょう。(民数記 6 : 1-3)

しかし、問題がありました。昔は水がそれほど清潔ではなく、病気の媒体になりました。そこでパウロは、きれいではない水から体を守るためにワインを少し飲むようにとテモテに助言しました。

古代社会では、ワインは体内を浄化するために用いられました。

汚染水による内臓疾患の治療に赤ワインが用いられていたことは、よく知られています。

今日の個所の文脈では、それはテモテに向けられた健康に関する個人的なアドバイスでした。

禁酒を決意したからと言って、健康のためにワインを少し飲むことでテモテが落胆しないようにとパウロは願いました。

きよくあるには、生きる上で賢明な選択をしなければなりません、そこには聖霊との交わりも必要です。聖霊との交わりが、聖書の教えに反することは決してありません。

一方、教会員の中には、教会リーダーに対してあまりにも厳しい基準を強い、自分なりのきよさの基準によって律法的になってしまう人がいます。そして、聖霊による合理性を欠いてしまうのです。

最近まで英国では、牧師が日曜日に余暇を楽しむことは許されていませんでした。私はときどき、日曜日の午後に説教を終えて緊張をほぐすために、プールや銭湯に行きます。けれども、英国にいたらそれは今でもできません。牧師がゴルフをしたり、サッカーやラグビーの試合を見に行ったりするのを嫌う教会員もいます。スポーツに夢中になりすぎたり、チケットにお金を使いすぎたりする可能性があることはわかっていますが、個人のきよさとは、人が作った規則を守ることではありません。むしろ、聖霊による神との一対一の関係です。多くのクリスチャンが、個人のきよさの趣旨を見誤り、律法主義になってしまいます。私たちはそのような過ちを犯しませんように。

## 2. 職場の人間関係 (6 : 1-2)

ここからは、当時の職場における人間関係に関するパウロの教えです。グレコ・ローマン時代には、被雇用者でもっとも多かったのが奴隷でした。ローマ帝国全体が奴隷雇用で成り立っていたと言えます。当時の状況を理解するには、私たちの持っている奴隷のイメージを取り払う必要があります。米国出身の方は、奴隷と言えば南北戦争以前の米国南部を思い浮かべるかもしれません。ひどい仕打ちを受けた黒人奴隷の姿です。皆さんが持っている奴隷のイメージがどんなものであっても、パウロがテモテに手紙を書き送った当時の様子を知るためには、そのイメージを一旦忘れてください。当時、畑の世話や収穫といった季節労働は日雇いの労働者がやっていました。これらの日雇いの労働者を監督していたのが、実は、土地所有者の所有する奴隷たちでした。大邸宅では、奴隷は料理人、家庭教師、あらゆる道具を作る職人でした。完全な制度ではありませんでしたが、ローマ帝国の労働人口の約7割に雇用を提供していました。実際、自由人よりも奴隷のほうが安定した職業だったのです。住居と定収入、じゅうぶんな食事があり、子どもも大きくなれば同じような職に就けるといいう安心感がありました。奴隷への虐待は、制度そのものが作り出したものではなく、人間の悪い心が生み出したのです。残念ながら、現代の職場でも酷使やハラスメントがありますが、人間の悪い心その根源です。旧約聖書の教えは、奴隷制を禁じていません。一方、奴隷の権利を入念に守りました。ユダヤ人を6年以上奴隷としてとどめておくことはできませんでした。(出エジプト 21 : 2)けれども、もし本人が望めば、奴隷の立場にとどまることを選べました。(出エジプト 21 : 5-6)妻子のある状態で奴隷になった人は、自由になるときに妻子も連れていくことができました。主人から妻を与えられた人は、妻が6年の奉公を終えるまで妻を連れていくことはできませんでした。奴隷が主人から虐待された場合は、自由の身になれました。(出エジプト 21 : 26-27)奴隷は宗教による権利も守られていました。(出エジプト 20 : 10)また、自由人と同じ人権もありました。(出エジプト 21 : 20)このような奴隷制度の背景を念頭に、奴隷が主人にどうかかわるべきかというパウロからテモテへの教えを見てみましょう。パウロは、6章1節でふたつ大切なことを述べています。奴隷、とくに「くびきの下にある奴隷」は主人を尊敬すべきです。(「くびきの下にある奴隷」とは、6年の奴隷期間が満ちても自ら奴隷としてとどまることを選んだ者を指します。)ここで語られている主人は、ノンクリスチャンとみられます。ここで使われたギリシャ語の単語は、立場に対する尊敬であり、内面に基づく心からの尊敬とは違います。

これは、スピード違反の切符を手渡されたときにその警察官に対して示すべき敬意、または自分は支持していないけれども国のために尽力している首相に対して示すべき敬意と同じです。

### **ペテロ第一 2 : 18-21**

2:18 しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい。

2:19 人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。

2:20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。

2:21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

これは簡単なことではありません。とくに日本の職場環境で、部下にひどい扱いをする上司を尊敬するのはなかなかできないことです。

そうできるのは唯一、聖霊が与えてくださる恵みと力とイエスへの深い愛によってです。

次に、6章1節でパウロは、権威ある立場の人を私たちが尊敬することで、神の御名と教えがそしられないと語ります。

これはどういうことでしょうか。

クリスチャン信徒の職場での態度やふるまいは、神とその教えに対する人々の印象を左右するということです。

パウロはとくに、福音の教理について語っているのでしょうか。

教理というのは、聖書の教えという意味です。

つまり、人は聖書を読む前に私たちの人生を読んでいるということです。

クリスチャンが主人に敬意を払わず、勤務態度が悪ければ、その人の仕えている神はどんな神かと主人はいぶかるでしょう。

また、人生を変える福音の力についても信用できないと思われるかもしれません。

パウロは、テトスに宛てた手紙でも同じ教えを記しています。

### **テトス 2 : 9-10**

2:9 奴隷には、すべての点で自分の主人に従って、満足を与え、口答えせず、

2:10 盗みをせず、努めて真実を表すように勧めなさい。それは、彼らがあらゆることで、私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。

パウロは、2節でクリスチャン同士の主人と奴隷の関係について教えます。

そういう環境では、キリストにおいては主人と対等なので、クリスチャンの奴隷が特別扱いを期待するという誘惑がありました。

また、成熟したクリスチャンが、クリスチャンとしては未熟な主人のもとで働かなければならないことも珍しくはありませんでした。

そうなると、職場における神のみこころに雇用者が従っていなければ問題が起こります。

ですから、奴隷の主人がクリスチャンかノンクリスチャンかは問題ではありませんでした。

奴隷はどんな主人も同様に尊敬しなくてはなりません。そして、クリスチャンの主人から特別扱いをしてもらえると期待するべきではありませんでした。

## **まとめと適用**

### **1. 長老・教会指導者**

今日は、長老を尊敬して守ること、そして長老を責めること、長老を選ぶことについて学びました。責めることはとくに、長老が偽教師だった場合です。

これらの教えについては現代にあてはめる必要があります。  
牧師のようにフルタイムで仕えている長老は十分な報酬を受けるべきだという原則はありますが、経済的に不可能な場合や、経済的に不必要な場合もあります。  
世界各地の教会で、フルタイムの職を持っていたり、高額の年金を受給していたりする長老がたくさんいます。その場合、教会から給与をもらう必要はありません。  
牧師と同等の働きはできませんが、みことばを教え、語り、そして指導者として仕えます。これはけっこうなことです。  
また、フルタイムの長老や牧師が必要だけれども、それに見合った給与を支払えない状況だという教会もあります。  
教会が十分な支払いができないなら牧師を持つべきではないと考えるクリスチャンもいます。それが正しい場合もありますが、そうでない場合もあり、慎重に状況を見極める必要があります。  
私がこれまで牧会してきた3つの教会はどこも、就任当初は生活できるだけの給与を払ってもらえませんでした。それでも私は、牧師として奉仕することを受け入れました。  
ある教会はお金があったにもかかわらず、給与を支払ってくれませんでした。  
それでウェンディが仕事をしなくてはならず、そのせいで教会での奉仕が十分にできませんでした。  
しかし後になって、生活に必要な給与を払ってくれるようになりました。  
指導者たちがその過ちを示され、必要以上の金額を払ってくれるようにまでなりました。  
そのおかげで、私は貯蓄することができ、OICに来る資金にあてることができました。

OICの場合は、皆さんもご存知のように、4年前にビザを申請してこの教会の牧師となるために、私は個人的に支援金を集めなくてはなりませんでしたが。  
当時のOICは、十分な給与を支払う経済状況になかったからです。しかし、経済状況が改善されれば十分な給与を支払うという約束がありました。私は指導者たちが約束を守ってくれと信用しました。  
献金額が増え、経費を節減し、教会は一年以上前に十分な給与を支払えるようになりました。役員がそうしてくれなければ、私の貯蓄は底を尽き、正直に申請してビザを更新することができなかつたでしょう。そうなっていたら、2018年の1月で英国に帰国しなくてはならなかつたはずで、そうならなかつたことを神に感謝します。

## 2. 長老は長老によって選ばれ、長老によって任命されなくてはならない。

これは聖書の教える原則ですが、大半の教会がこの聖書的原則に従っていません。  
私の娘婿は、英国で説教担当の牧師であり長老です。  
彼は、今の職に任命される人選に長老だけが関わっていたことを不思議に思ったそうです。  
しかし、聖書の教えに照らせば、この長老たちは100%正しいのです。  
もちろん娘婿は教会員に紹介されて、あらゆる質問を受けました。そして、説教もしました。  
けれども、最終的な決断は長老たちが下しました。  
神はなぜそのような規則を作られたのだらうと思うのでしょうか。  
それは、良い長老は良い長老を見分けられると神がご存知だからだと思います。  
私自身が良い日本語の先生でなければ、誰が良い日本語の先生か私にわかるはずがありません。  
ヨシュアはモーセと長年ともに働きました。モーセはヨシュアのことをよく知っていて、彼を指導しました。ですからモーセは一番よく分かった立場から、イスラエルの民を約束の地へと導く後継者としてヨシュアを支持しました。  
このような理由から、多くの教会は、主任牧師が退任した際の後継者とするために、可能であれば副牧師を任命したいと考えるのです。

## 3. 日本の職場における人間関係

日本の職場環境はたいへんだというのは世界中でよく知られています。政府は、働き方改革に取り組むよう企業に勧め、柔軟な働き方、残業時間の削減、諸外国の職場では必要とされない行事参加などのプレッシャー軽減などを目指しています。

また、労働者不足により、出産後の女性の職場復帰を促す努力をしています。

言うのは簡単ですが、保育施設の不足により、これもなかなか実現は難しいようです。

今日の聖書箇所から得られる日本の職場における日本人クリスチャンの課題は、キリスト教信仰を妥協せずに、一生懸命働き、上司に敬意を示すようふるまうことです。

職場で働く日本人にとって、これは難しい複雑な問題です。

今日この問題をすっきり解決できるとは言いませんが、私たちは聖書を読んで神のみことばに従うことができます。そうすれば少なくとも、神は私たちの努力を認めてくださるでしょう。

第一に、パウロは上司の立場や役職に敬意を払うようにと教えます。それは必ずしもその人の人間性を心から尊敬することではありません。

上司は良い人ではないかもしれませんが、それでも部下として仕事には敬意を示す必要があります。

キリスト教信仰を妥協しなくても、あらゆる方法で積極的に敬意を示すことができます。

第二に、パウロの教えから明らかなのは、職場で働いている間も私たちはイエスの証人であるということです。

私たちは、聖書が禁じている事柄をするよう求められても断ることができます。

そして、断る正当な理由を述べることができます。自分がクリスチャンであること、そしてなぜ求められたことができないかという理由を伝えるのを恐れてはいけません。

そうすることで、キリスト教信仰の良い証人となれるからです。

そのことで職を失ったとしても、神が面倒を見てくださり、必要を備えて、報いてくださるでしょう。神は私たちの天なる父なのですから。

第三に、上司に対して賢い対応をしようとするのは良いことです。これは今日の聖書箇所にはありませんが、これが役に立つかもしれません。

では、賢い対応とはなんでしょう。

例を挙げて話してみましょう。

上司と同僚から飲みに行こうと誘われたとします。

あなたは、クリスチャンなのでお酒はあまり飲まないと言います。

すると、とりあえず一緒に行こう、オレンジジュースでも飲んでいれば酔わないし、自分たちがちゃんと家に帰れるように見張り番をしてくれ、と言われます。

さてどうしましょう。

そこで、あなたはこう答えます。

もし一緒に行ったら、明日の朝に疲れが残って、仕事に集中できなくなるかもしれません。

上司のことも会社のことも尊敬しているので、今日はおとなしく帰ります。そうすれば、明日の朝は疲れもなく、精いっぱい仕事に取り組めますから。というわけで、今晚は遠慮します。

このようにきっぱりと言いましょう。

各々の状況に当てはまる知恵をいただけるよう神にお願いしましょう。神のことも職場のことも同時に大切にするためです。

むずかしいかもしれませんが、少なくとも試してみることはできます。

神と上司の両方を尊敬できるよう、神が助けてくださいますように。